

港のたより



(一社) 寒地港湾技術研究センター
COLD REGION PORT AND HARBOR ENGINEERING RESEARCH CENTER



小樽港に初寄港したダイヤモンド・プリンセス(平成26年6月)

Contents

港湾ニュース

稚内港北防波堤ドーム技術検討委員会の開催	2
函館港弁天地区水深6.5m 岸壁の完成について	3
クルーズ客船寄港増に伴う小樽港における歓迎事業について	4
石狩湾新港開港20周年記念シンポジウムについて	6
食料流通備蓄セミナーin 稚内を開催	7
第10回釧路港舟漕ぎ記念大会を終えて	8
平成26年度寒地土木研究所一般公開開催報告	11
地域マリンビジョンにおけるモデル地域の追加指定について	12

シリーズ

地域での「みなとオアシス」の取り組みについて vol. 1	14
-------------------------------	----

センター通信

「第2回 CPC 交流セミナー」を開催	16
自主調査研究テーマの募集と検討について	16
メールアドレス登録へのご協力をお願い	16

お知らせ

「津波漂流物対策施設設計ガイドライン」刊行・販売及び講習会のご案内	17
「2014年北海道海洋深層水フェア」開催のご案内(予告)	17
第3回 CPC 交流セミナー開催のご案内(予告)	18
「ザ・シンポジウムみなと in 札幌」開催のご案内(予告)	18

vol. 110
2014.9.30

■ 稚内港北防波堤ドーム技術検討委員会の開催

稚内開発建設部 稚内港湾事務所

稚内港北防波堤ドームは、北海道遺産、土木学会選奨土木遺産にも選定されている歴史的構造物であり、「わっかないみなとオアシス」の中核施設として市民や観光客に日常的に利用されている施設です。しかし、昭和 53 ～ 55 年にかけての大改修以後すでに 30 年以上経過し、コンクリート剥離劣化等の老朽化が顕在していることから、ライフサイクルコストを考慮した維持管理計画と適切な補修計画の策定が急務の課題となっています。このため、稚内開発建設部では、北防波堤ドームの施設現況の評価と維持管理及び補修計画の策定を目的とした「稚内港北防波堤ドーム技術検討委員会」（委員長：横田弘北海道大学工学院教授）を組織し、平成 26 ～ 27 年度の 2 か年で検討することになりました。

本年度の第 1 回委員会は、7 月 31 日に稚内市の「ANA クラウンプラザホテル稚内」で開催されました。最初に横田委員長から「非常に有名な構造物であり、個人的にもかねてから興味を持っていた施設です。北防波堤ドームの補修については、マニュアル化されていない技術も含め適切に補修し末永く使っていただきたい」と最初に挨拶がありました。

委員会の最初に、当該施設の建設及び改修・補修の経緯、全体調査計画、本年度の老朽化調査内容などが事務局により紹介されました。今回の委員会の主要な議題として、一つめのポイントとしては、本年度行う北防波堤ドーム港外側の調査方法及び留意点の確認が行われました。本年度の現地調査に先立ち、北防波堤ドーム床版部の劣化状況を把握するために、静電位等の非破壊試験と鉄筋のかぶりと錆状態を確認する試験が行われ、その速報値に基づき、調査間隔等の設定や調査項目の追加が審議・決定されました。

もう一つのポイントとしては、その部材の補修・交換の要否及びその優先順位を判断するための評価手法についてです。これについては、今年発刊された「港湾施設の点検診断ガイドライン」には、点検調査後の

劣化度の判定及び性能低下度の評価方法についてはそれぞれの構造物に応じて設定することとなっています。そこで、今回の委員会では、床版部を例にとり、部材を評価するための部材分割方法、性能を評価する安全性と使用性の係数設定、補修・交換の判断についての考え方が示され審議されました。

本年度の委員会は 3 回開催が予定されており、第 2 回は 12 月上旬開催の予定で、港外部の現況調査結果の報告と、評価方法について具体的なモデルケースをもとにした評価例を示すとともに評価方法の詳細について審議する予定です。



稚内ドーム委員会横田委員長



稚内ドーム委員会

函館港弁天地区水深 6.5m 岸壁の完成について

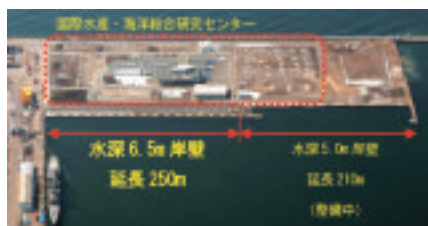
函館開発建設部

1. はじめに

函館港は慢性的に係留施設が不足している状況にあり、荷役岸壁を調査船や練習船などが輻輳利用するため、荷役待ちが生じ岸壁の利用が非効率となっていました。このため、これら港内岸壁を散在係留している調査船等を弁天地区に集約し、荷役岸壁における物流の効率化を図ることを目的として、平成 18 年度から水深 6.5m 岸壁の整備を進めました。

一方、函館市では、更なる地域の活性化を推進すること目的として「函館国際水産・海洋都市構想」を平成 15 年 3 月に策定し、産学官の各種学術機関が集積する「国際水産・海洋総合研究センター（以下、研究センター）」の整備を進めてきました。

平成 26 年 6 月、水深 6.5m 岸壁と研究センターが同時に供用を迎えることとなり、調査船等との一体的な利用により更なる研究の効率化が期待されています。



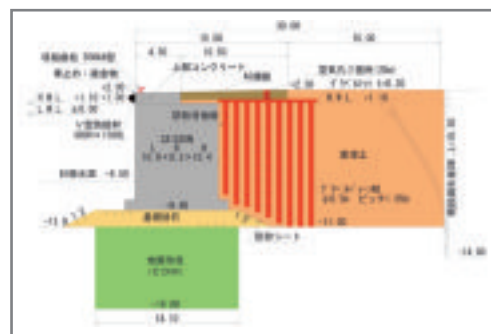
函館港弁天地区の全景

2. 工事概要

弁天地区は、30GT 級から 5,000GT 級の調査・実習船を利用対象とし、水深 6.5m 岸壁 250m と水深 5.0m 岸壁 210m を計画しています。

弁天地区の既存岸壁は、平成 5 年の北海道南西沖地震に伴う背後地盤の液状化により倒壊し、施設の再利用はもとより、撤去すら行えない状況にありました。このため、岸壁法線を 30m 前出しし、堤体をケーソン式構造としました。堤体下の海底地盤には軟弱な粘性土層を有することから地盤改良が必要となり、深層混合処理工法（CDM）により固化処理を行うこととしました。また、施工中においても既存岸壁の倒壊が懸念されることから、水深 6.5m 岸壁については裏込石を必要としない構造を採用し、水中作業を極力減らすことによる施工中の安全確保に配慮しました。さらに、ケーソン中詰材、裏埋土には港内浚渫等により発生した土砂を活用し環境へ配慮しつつ、裏埋部分はグラベルドレーン工法により液状化対策を行い、平成

26 年 5 月末に水深 6.5m 岸壁は完成しました。



水深 6.5m 岸壁 断面図（C 部）



CDM 施工状況



グラベルドレーン施工状況

3. 供用開始式典

去る平成 26 年 6 月 2 日、ご来賓や地元関係者など約 250 名に上る方々の出席を賜り、水深 6.5m 岸壁及び研究センターの供用開始式典を函館開発建設部と函館市により共催しました。

式典は研究センターにおいて行われ、高橋はるみ北海道知事をはじめ、前田一男衆議院議員、佐藤英道衆議院議員、高橋みほ衆議院議員、鈴木貴子衆議院議員、横山信一参議院議員にお言葉をいただくとともに、テープカットが行われ、函館市の経済活性化の一助となる施設の供用開始を盛大に祝いました。



供用開始式典テープカットの様子

4. おわりに

函館開発建設部では、引き続き水深 5.0m 岸壁の整備を進め、更なる利便性向上及び地域経済の活性化を図っていきます。

クルーズ客船寄港増に伴う小樽港における歓迎事業について

小樽市 産業港湾部 港湾室

■はじめに

平成 26 年の小樽港へのクルーズ客船の入港回数は、
昨年 の 19 回 から 38 回 と 倍 増 す る 見 込 み で す。

これまで本港における客船歓迎事業は、初寄港の客船を対象とした歓迎セレモニーや地元太鼓グループによる見送り打演などを中心に行ってきましたが、昨年、クルーズ客船誘致や受け入れ態勢の強化を図ることを目的として、国等の関係機関や市内の経済、観光、港湾関連団体並びに北後志地域の観光協会ら 23 団体からなる「小樽港クルーズ推進協議会(会長 小樽市長)」を設立し、寄港増に対応した新たな取組を実施しています。



船全景

■「2014 小樽クルーズ・ウェルカム・フェスタ」の開催

小樽港に過去最大級となる「ダイヤモンド・プリンセス（総トン数 115,875 トン）」が初寄港した 6 月 7 日（土）、乗船客を歓迎するとともに小樽のクルーズシーズンの幕開けを市民にも広く周知し、クルーズ振興の機運を盛り上げることを目的として、勝納（かつない）ふ頭で「2014 小樽クルーズ・ウェルカム・フェスタ」を開催いたしました。

当日は、小樽港クルーズ推進協議会加盟団体である小樽や北後志地域の積丹町、古平町、仁木町、余市町の観光協会等による物産品販売や観光 PR、「小樽あんかけ焼そば」をはじめとする飲食ブース、市民フリーマーケットや骨董品・手作り雑貨市などに加え、地元の小樽桜陽高校と小樽商科大学茶道部による野点、同大学写真部、美術部の作品展示、販売などを行ったほか、小樽や札幌のアマチュアグループによるバンド演奏と「ゆるキャラショー」などを実施し、乗船客ばかりでなく多くの市民の皆さんにもご来場いただきました。

乗船客や乗組員の皆さんには、初寄港の小樽で盛大な歓迎イベントを開催したことに大変喜んでいただいたほか、市民の皆さんの中には、クルーズ客船を見るために初めて勝納ふ頭まで足を運ばれた方も多く、巨大なダイヤモンド・プリンセスを間近に見て楽しんでいただきました。



会場全景



後志観光協会の出店



ステージ風景



ユルキャラショー

■「サン・プリンセス北海道周遊クルーズ就航記念式典」の開催

今年、「サン・プリンセス（総トン数 77,441 トン）」が小樽港を出港して函館、室蘭、釧路、そして知床半島をクルージングした後、網走、コルサコフに寄港して小樽に戻ってくる「北海道周遊とサハリン 8 日間」が 12 回催行されるにあたり、その第一回目の出発日である 6 月 28 日（土）、勝納ふ頭において就航記念式典を開催いたしました。

式典は北海道クルーズ振興協議会と小樽港クルーズ推進協議会の共催として実施し、同船関係者とともに、国等の関係機関、小樽市及び寄港地である他の道内 4 港湾の関係者らに出席いただきました。主催者を代表して北海道クルーズ振興協議会の磯崎道利代表世話人（北海道運輸局次長）からは「このクルーズは確実に北海道でのクルーズの認知度を高めることになります。北海道クルーズ振興協議会では、各港と連携したイベントの開催や、観光関係者とも連携した取組により、大きな経済効果が期待できる定点クルーズの一層の受け入れ環境の整備に努めてまいります。」との言葉があり、小樽港クルーズ推進協議会の中松義治会長（小樽市長）からは「北海道の港湾には毎年多くのクルーズ客船が寄港しますが、外国船籍の船で 12 回もの定点クルーズを行うことは初めてであり、その発着港に小樽港を選んでいただいたことを大変光栄に思っております。」と挨拶がありました。

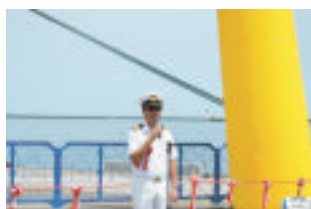


磯崎次長



中松市長

マリオ・チールツィ船長からは、「素晴らしい歓迎セレモニーを開催していただきありがとうございます。これから北海道を 12 回周遊することになるので、乗船客や乗組員一同、心から楽しみにしています。」との返礼の挨拶があり、式典の最後には航海の安全と成功を祈念したテープカットを行いました。



マリオ船長



テープカット

同日 17 時に「サン・プリンセス」は次の寄港地である函館に向けて出港し、9 月 13 日（土）までの連続 12 週にもわたる北海道周遊クルーズをスタートさせました。

■おわりに

クルーズ客船の寄港は地元への経済効果が見込まれることから、各港湾それぞれに知恵を絞った誘致活動や受け入れ態勢の強化に努めているところであります。小樽港としては、昨年設立した「小樽港クルーズ推進協議会」が中心となり、官民が連携して問題意識や情報を共有しながら各種事業に取り組んでいく予定です。

あわせて、今回開催したサン・プリンセス北海道周遊クルーズ就航記念式典のように、寄港港湾が一体となって実施する PR 活動や歓迎行事なども効果的であり、今後とも北海道クルーズ振興協議会をはじめ関連団体と連携しながらクルーズ客船の誘致に取り組んでまいります。



記念撮影



出港バルーン

石狩湾新港開港 20 周年記念シンポジウムについて

石狩市 企画経済部 港湾・企業支援課

1. 開港 20 周年を迎えた石狩湾新港

石狩湾新港は、北海道の中心都市である札幌市から 15km、車で 30 分ほどの距離に位置しております。

石狩湾新港の開発は、北海道の日本海側の物流拠点として、日本海沿岸地域の発展に寄与するとともに、北方圏交流の拠点としての役割を積極的に担うことを期待され、スタートしました。

昭和 48 年から建設工事が始まり、入港第 1 船となる旧ソ連のブランカ・レーニア号を迎えたのは、約 10 年後の昭和 57 年のことです。

その後、入港船舶数や取扱貨物量も着実に増え、平成 6 年に、念願であった「税関・出入国管理・検疫」の指定を受け開港し、国際貿易港としての歩みを始めたのです。

国際貿易港に指定された後は、外貿定期コンテナ航路の開設などにより順調に発展を遂げ、外航船入港数 1 千隻の達成は、道内港湾で最短を記録しています。



写真 1 現在の石狩湾新港

2. 開港 20 周年記念シンポジウム

平成 26 年 6 月 10 日、石狩湾新港が国際貿易港として 20 周年を迎えたことを記念し、道央圏のエネルギー・物流の拠点、北東アジアをはじめとする国際物流の拠点として更なる飛躍を目指すため、「石狩湾新港地域の未来を拓く」をテーマに、シャトレゼガトーキングダムサッポロにおいてシンポジウムを開催しました。

シンポジウムでは、一般財団法人日本総合研究所理事長寺島実郎氏をお迎えし、「エネルギー地政学の現状と日本経済」についてご講演いただいたほか、北海道大学公共政策大学院特任教授小磯修二氏をコーディネーター、財務省函館税関長木村祐二氏、北海道ガス

株式会社代表取締役社長大槻博氏、石狩湾新港振興会会長山田藤夫氏、石狩市長田岡克介をパネリストとして「世界における石狩湾新港の役割」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

寺島氏の基調講演では、世界のエネルギー事情、日本海物流におけるロシアとの外交・経済交流の重要性など、開港記念にふさわしいグローバルな視点で石狩湾新港の今後の可能性が語られました。

また、パネルディスカッションでは、田岡市長から、石狩湾新港地域への LNG、LPG などのエネルギー施設の集積を踏まえて、洋上風力発電計画、超電導実証実験などのエネルギー基地としての将来像が語られました。他のパネリストからは、国際貿易における石狩湾新港のポテンシャルなどについて語られました。

シンポジウムには、460 人を超える方々が来場し、盛況の内に閉幕しました。



写真 2 開港 20 周年記念シンポジウム

3. 今後の更なる発展に向けて

石狩湾新港は、国際貿易港として 20 周年を迎えたばかりのまだまだ「若い」港です。

シンポジウムでも語られたとおり、石狩湾新港地域には LNG 基地などエネルギー関連施設が集積しております。また、データセンターの立地や超電導の実証実験など次世代に向けた新しい動きも出始めています。

石狩市としては、これらの港の特徴や優位性を生かし、石狩湾新港の末永い発展を目指して、努力を続けて参ります。

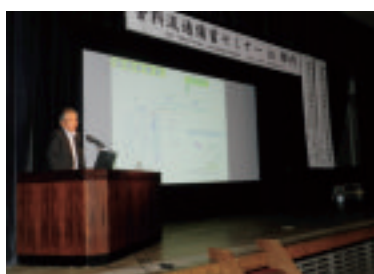
食料流通備蓄セミナー in 稚内を開催

稚内商工会議所

食料流通備蓄推進協議会と稚内商工会議所共催の「食料流通備蓄セミナー in 稚内」が、7月3日（木）15時より関係者160人参集の中、稚内総合文化センターで開催されました。

このセミナーでは、当地稚内で雪氷冷熱技術を利用した食料保存の事例報告と、自然冷熱エネルギーを利用した倉庫で、食料を貯蔵・保管し、収穫後の農産物を産地で出荷調整することで、北海道の流通問題を解消し、農産物の付加価値を高めることについておよびサハリンとの交流において、生鮮食料品を稚内から運び込むことの可能性について講演をいただいております。

はじめに、主催者として食料流通備蓄推進協議会の岸本会長（美唄商工会議所会頭）から開会挨拶がありました。



事例報告の菊池社長

事例報告では、稚内で雪氷冷熱による食品貯蔵に取り組んでいる、山本建設株式会社 代表取締役の菊池 工 氏から「稚内市における自然冷熱エネルギーへの取り組み」と題して事例報告を行い、食糧貯蔵の具体的な事例として、氷による雪氷冷熱を利用した貯蔵を紹介し、「勇知いも」の事例では、長期保存が可能だけでなく、9ヵ月間、雪氷貯蔵した「勇知いも」は、高品質で保管貯蔵されており、デンプンとビタミンCを糖に変え冬に備えていく糖化現象により糖度を増し、甘く美味しいイモとなるとのことで、関東のスーパーからも非常に高い評価を得ているとのことでした。

続いて講演は、北海道開発局 港湾空港部長の川合 紀章 氏が「農産物の付加価値を高める食料流通備蓄」と題して講演を行い、道産農産物の物流の現状と課題では、本州に農産物を移出するのは収穫期の秋が多く、夏は殆ど移出されていないのが現状で、北海道から東京に帰るトラックは空が多く、帰り荷がないことから北海道物流コストが高くなっている。更にビジネスチャンスを逃しているのは、東京市場で北海道産馬鈴薯は4月までコンスタントに入荷されているが、夏は長崎や鹿児島が多い。価格も秋に一気に市場に出

すことから道産品は安値となり、無い時期は高くなる。高く売れる時期のビジネスチャンスを逃している。

この解決策は「食料備蓄」で、雪氷等の豊富な自然エネルギーのある北海道で、安い土地の倉庫で自給調整すれば各課題が解決する。高付加価値化では、「低い温度で農産物を貯蔵すると糖度が上がる」。また、「輸送の平準化による輸送コストの低減」と「産地貯蔵による農産物の安定供給」では、年間を通し農産物を移出することで安価な物流コストとなり、戦略的に値の高い時期に出荷することができる。

6次産業化では、「産地における食品加工産業の成立」があり、産地に備蓄することで食品加工ができる。加工することで農産物がダウンサイジングし輸送コストが下がり、保存がきくことで物流の平準化にもつながる。「循環型農業の形成」では、加工で出たごみは産地では肥料になる。農産物を産地に置くことで、物流が良くなり、産業が生まれ、農産物の付加価値も上がる、良い事づくめである。北海道の食の一大産業クラスター化が、目指すべき姿ではないか。

食糧供給基地の形成では、生産地に作ることで、流通拠点にも必要で需要があった際にスピーディーに供給できるようにしたい。

稚内のことについて、サハリンでも雪氷倉庫に注目しているが、稚内で先に倉庫を造り戦略的に平準化して売っていくことが大事である。稚内にはフェリー航路があり、農産物をフェリーのベースカーゴにしてはどうか。サハリンに対し農産物を戦略物資にすると、日常品も売れるようになり、フェリーも安定運航ができるようになる。

稚内は道北の一大流通基地になる可能性を持っている。稚内はあらゆる意味で可能性を秘めており、新しいビジネスチャンス、失っているビジネスチャンスがあるので、ご理解いただいて取組んでもらえれば幸いですと締めくくられました。

最後に、中田会頭がお二人の講師に対し、感謝の言葉を述べ終了しました。



講演の川合部長

第 10 回釧路港舟漕ぎ記念大会を終えて

釧路港舟漕ぎ大会実行委員会



1. はじめに

早いものである。「釧路港舟漕ぎ大会」も 10 回目を迎えた。第 1 回から 10 年が過ぎたことになる。昔は 10 年一昔と言って 10 年前の事は遠い過去の話しになったが、日本人の寿命が延びたことにより時間の感覚が違ったものとなって、第 1 回大会が昨日のように感じられる。

この 10 回の節目に何故、今舟漕ぎ大会かというその目的・目標から遡って見たいと思う、第 1 回の舟漕ぎ大会終了した平成 17 年 11 月に、今は故人となられた「NPO 法人北海道みなとの文化振興機構」当時の理事長田中敦幸さんが招集した舟漕ぎ全道大会の取組についての会議が開かれた。道内 5 港（紋別港、十勝港、石狩湾新港、苫小牧港、釧路港）の管理者が出席した。

この会議の主旨は、平成 17 年 8 月 6 日に第 1 回釧路港の舟漕ぎ大会実施した結果を踏まえ、今後実施港を増やして、ゆくゆくは全道大会開催をするというための取組についての集まりであった。釧路大会からの実施後の問題・課題について報告を受けた後、故田中理事長は港祭りの現状と港を利用したイベントの必要性を自分の苫小牧港開発(株)時代、フェリー岸壁を利用して行った「港ふれあいフェスティバル」の体験から今後、全道舟漕ぎ大会を目指して取組という力強い言葉で閉められた。

今、この会議の議事録を改めて見て、ここに 10 回大会の報告と全道大会の取組経過とその結果についての継続的改善 PDCA を行ってみたい。

2. 第 10 回釧路港舟漕ぎ記念大会

今回の 10 回大会は、節目の大会という位置付けで半年前から準備委員会を設置して検討してきた。

結果、1) 国際色豊かにするため、台湾・韓国チームの参加、さらに管外チームについての参加呼びかけ。2) 全道大会の準備としての位置付けから全道舟漕ぎ実施港の参加勧誘。3) 前夜祭の充実、賞金アップ。4) 参加チームの検討。が課題として取り組むこととした。これらの検討した結果、6 月の総会に案が出された。

第 10 回大会は記念大会という優勝賞金は 50 万円(普通 20 万円)、その他に市内の各企業よりの副賞、さらに募集参加チームは試合数が時間割の関係 (1 試合 5 隻) で 30 試合が限度で最大 90 チーム(一般 65 チーム、女性 25 チーム) とした。

以上の要領で募集の結果、台湾・韓国も参加することが決定し、従来より参加している KCM 中国・ベトナムチームの参加により国際色が豊かになった。応募チームは一般 68 チーム、女性 23 チームの計 91 チーム(補欠 1 チーム)。その他の応募チームは東京からの参加チーム、一方、根室・室蘭の舟漕ぎ大会からの参加、そのほか思いもよらない北大のよさこいチーム(赤フン) 緑が男女チームの参加と従来の異色チーム、平均年令 73.8 才の船員 OB チーム、漁師の兄弟舟チーム、その他病院、振興局、開発局、市役所、銀行、海上保安部等々、90 チームの内訳は職種別に分けた下表のとおりである。

官庁関係	20 チーム	友達・仲間	13 チーム
政治団体	6 チーム	学校関係	7 チーム
病院関係	2 チーム	海外チーム	4 チーム
漁業関係	5 チーム	他港チーム	2 チーム
会社関係	18 チーム	その他団体	13 チーム



以上の参加メンバーで 8 月 2 日(土) 8 時からの開会式は会長挨拶後、来賓者 19 人もいるため、代表挨拶は市長と地元代議士に各々 2 分という時間制限で受けた後、8 時 25 分から第 1 試合は、会長と来賓者 17 人によるピストルの号令とともに開始した。当日は、舟漕ぎにとって命とも言える天気は、これ以上は望めないという晴天に恵まれた。



この大会にとって名物となった女性アナウンサーの名調子の司会で快調に進み、予選一般 14 レース、女性 5 レース、一般敗者復活戦 2 レース、準決勝女性 2 レース、一般 4 レースが 13 時 30 分までに終了し、その後下位 5 チームによる決定戦（下位決定戦一般 1 レース、女性 1 レース）で笑いをとり、何とも言っても決勝戦は、女性優勝賞金 25 万円、一般優勝賞金 50 万円は、真剣勝負となる。決勝はまず女性から行うが、出場チームは 1 隻ずつ両岸の観客に対して顔見せを兼ねて一周し、その間に応援団が競技者紹介をする。今回の女性チームは三連覇中のチームが、競技者が集まらずに欠場したため本命が不在で混沌して、どのチームが優勝しても不思議でないという状況で、過去 3 連覇したこともある漕ぎまくり隊が折り返し後追い込みで優勝した。



一般の決勝は、大本命は昨年の優勝チームの第 15 富丸チーム、毎回決勝には残るが優勝できない釧路製作所燦々会チーム、昨年から参加のアイスホッケーチーム日本製紙クレインズチーム、毎回決勝に残るようになった海上保安部 J & H1 チーム、今回初めて決勝に残った漁組キングサーモンズチームという顔ぶれであった。さすがに 50 万円を手に入れるのにあと一歩のところまで来た各チームは真剣そのものであった。

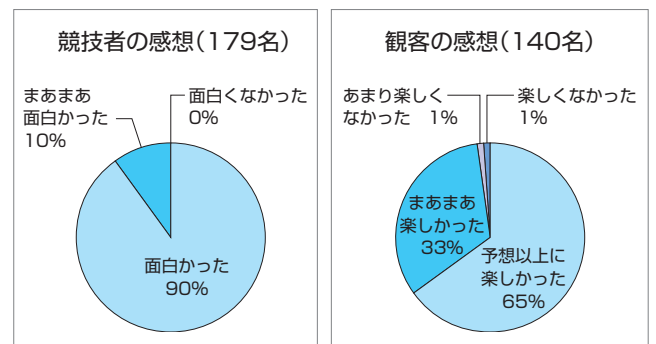
スタートの静寂を破る号砲一発で各艇一斉漕ぎ出し、折り返し地点までは差がなく、折り返し地点では第 15 富丸が僅かに早かったが、ほとんど同時、後半第 15 富丸に疲れが見えた時点で J & H1 が追い込んで優勝をさらった格好となった。以下、燦々会、キングサーモンズ、日本製紙クレインズという結果で終わった。

この緊張感、面白さの醍醐味は紙面での紹介では隔靴搔痒の感がある。是非一度見ていただきたい。

その後、閉会式・表彰式を行い終了した。



第 10 回大会は、出場チームが過去最多に伴い、観客も大幅に増えた。この結果、顧客満足度も観客 98%（昨年 86%）、競技者 100%（昨年 84%）と非常に高い支持を得た。



3. 全道大会開催へのもう一つの取組の試案

現在、舟漕ぎ大会が行われているのは、調査漏れもあると思うが、根室港（根室港舟漕ぎレース）、釧路港（釧路港舟漕ぎ大会）、江差港（全道北前船競漕大会）、臼尻漁港（舟漕ぎ競争）、網走湖（北海道ドラゴンボート競技大会）、ラウネ川（舟漕ぎ大会 in ラウネ川）、稚内港（稚内副港ボートレース）、函館港（函館ペリーボート競漕）、苫小牧港（はすかつぽボートレース）、室蘭港（むろらん港鉄人舟漕ぎ大会）、鹿部漁港（カッター競漕大会）の 11 港であり、今後も増え続けるはずである。

全道大会開催の今までの取組は、舟漕ぎ大会実施の勧誘を行ってきた。すなわち、ボトムアップ方式を採ってきた。この方法で行えばどうしても地方のオリジナルを加えるところが多く、ルールの一統ができなかった。

この原因は、故田中理事長が構想した全道大会開催を最終的目標とするという理念が欠落して、地方実施そのものが目標になった為だと考えられる。これを解決する為には、トップダウン方式を採用。すなわち、デモンストレーションを兼ねて小樽港か、石狩湾新港で全道大会開催をして、そのルールを今後の実施港に波及させる方法が良いのではないか。

若し、某新聞の札幌・小樽の地方版に、〇月〇日、全道舟漕ぎ大会参加者募集、練習は茨戸湖で〇〇日～〇〇日、この大会予選勝者と、根室、釧路、室蘭、(稚内?)の各地区代表との決勝戦を行うと掲載して実施する。

このデモンストレーションを通してルールが同じ舟漕ぎ実施港を普及させる。そのことから前述の試案を考えてみた。

この札幌・小樽での大会は、準備と相当なボランティアの人員が必要となるが、釧路で舟漕ぎ大会を立ち上げたノウハウと港湾関係者の協力があれば不可能でない。しかし、懸念されるのは我々に、その情熱とエネルギーが残されているにかかっている。



4. あとがき

釧路港舟漕ぎ大会は、継続的改善 PDCA を行い改

善し、1 ヶ月前から練習日を設けて盛り上げ、祭りの宵宮としての前夜祭、本祭りの舟漕ぎ大会、後夜祭として写真コンテスト・展示会、舟漕ぎ大会の約6時間のイベントを練習含め1 ヶ月というイベントへ成長させた。ゆくゆくは、釧路川・春採湖の練習を1つの風物詩にすることを考えている。また、故田中理事長に約束した全道大会開催については、今までの報告のとおりで釧路についてはよくやったと及第点はとれると思われるが、残念ながら全道への普及について、後任のNPO理事長と取り組んだが、その後、函館、苫小牧、稚内、室蘭と輪は広がったが、室蘭以外はルールを統一できなかった。これは我々の努力不足ということになる。

来年の釧路の第11回大会は、宴の後の大会で賞金も元に戻すため、その分楽しくするための別の味付け・工夫が求められてくる。そのためには、第10回大会の競技者(179名)・観客(140名)のアンケートが参考になる。その結果の顧客満足度は先述したとおりである。

なお、観客については、別途意見を記入式では意見を聴取しづらいということで、インタビュー方式で舟漕ぎ大会の感想・大会に対する意見を71名からアンケートを実施した。

この71名の釧路港舟漕ぎ大会に対する観客の感想は、釧路のイベントとして素晴らしい、迫力がある。また初めて見た人は何故もっと早く来なかったのか等々。継続性についても各国・全国・全道からの参加で全道大会を開催して欲しい。港・河・魚の街のイベントとして大賛成、このことが街の活性化になり地域に貢献するから続けて欲しい等々、実行委員会事務局として胸が熱くなる意見が多かった。

なお、参加チームからの意見は大会関係者に対する感謝の意見が50%を超え、改善に対する意見も多く、今後第11回大会の参考にしたいと思っている。

今後は本大会への市民の熱い想いを実現するため、釧路の地域活性化は勿論のこと、北海道の短い夏を謳歌するための海のイベント、全道舟漕ぎ大会開催し、故田中理事長の思いに報いたいと思っている。



平成 26 年度寒地土木研究所一般公開開催報告

(独) 寒地土木研究所 寒冷沿岸域チーム
水産土木チーム

平成 26 年度寒地土木研究所一般公開を 7 月 4 日（金）・5 日（土）の 2 日間にわたり開催しました。2 日間とも天候に恵まれ、1,131 名のお客さまにご来場いただきました。毎年恒例となった一般公開ですが、今年も各研究チーム・研究ユニットが工夫を凝らした研究内容の紹介や土木の専門的な技術者の皆さんの質問等にお答えする技術者のための研究説明コーナーを開設し、子供だけでなく大人の皆様にも、それぞれのコーナーで様々な実験・体験・発見を楽しんでいただきました。

寒冷沿岸域チームでは『見て体験して学ぼう私たちの海』をテーマに、色々なブロックで遊ぶコーナー、水槽での実験、低温観測室での実演（サーモグラフィー体験）などを行いました。港などに設置されている消波ブロックのミニチュアで遊ぶコーナーでは、実験で実際に使用しているブロックやクッションタイプのもがあり、見本に習いブロックを積み上げて防波堤を作る体験をしていただき、子供たちに人気の会場となりました。また、波を発生させることのできる小型

水槽での実験では、ブロックの効果が一目でわかるように工夫されており、来場者は感心し、研究所をより身近に感じていただけました。

水産土木チームでは『さわって・見て・学ぼう、北の海の生きものたち』と題して、港内泊地の水質浄化が期待されるホタテ貝殻礁の展示、アサリによる水質浄化の実演を行いました。また、任意波形振動流発生装置により海底の流れを再現し、ナマコなどの生物の動きを観察しました。さらに、ナマコ、ウニ、ホタテ、ホッキガイなど、北海道沿岸に生息する海洋生物を集めたタッチプールを設けました。普段、海の生物に直接触れることが少ない子供達にとって貴重な経験であり、大人気の会場となりました。

来年も多くの皆様のご来場をお待ちしております。



消波ブロックで遊ぶコーナーは子供達に人気



消波ブロックの説明に真剣な小学生



子供たちに海の生き物について説明



ナマコなどに直接触れるブースは子供たちに大人気

■ 地域マリンビジョンにおけるモデル地域の追加指定について

北海道開発局 農業水産部 水産課

1 はじめに

北海道開発局では、有識者によるモデル地域マリンビジョン講評委員会（平成 26 年 6 月 26 日実施）の講評を受け、モデル地域の追加募集（第 5 次）に応募のあった 4 地域（遠別、積丹、様似及び厚岸）の審査を行い、7 年ぶりに「モデル地域」及び「推進地域」の追加指定を行いました。

本指定にあたっては、7 月 22 日の「北海道マリンビジョン 21 促進期成会総会」の場において公表を行うとともに、北海道開発局長から関係町長に認定書の交付を行ったところです。

2 モデル地域等に追加指定した地域の選定について

■ 「モデル地域」の追加指定

先駆性や独創性が認められ、他地域のモデルとして見込める地域である「モデル地域」には、遠別、積丹及び厚岸の 3 地域を追加指定しました。各地域の概要及び選定理由は、下記の通りです。

○遠別地域

【地域マリンビジョンの概要】

地域の目指す姿として「農林水産業の連携によるクリーン産地の形成」を掲げるなど、資源、環境、生産・流通・加工、地域振興の各視点から、多様な取組を計画しています。

【選定理由】

「ひらめ底建網 in 遠別」やカワガレイのブランド化等の取組は、独創性や広域性があり、北海道マリンビ



写真 1 遠別地域：「ひらめ底建網 in 遠別」開催状況

ジョン 21 を具現化する取組が充実していることから、他地域のモデルとして評価しました。

○積丹地域

【地域マリンビジョンの概要】

地域の目指す姿として「連携と協働による産業振興」を掲げるなど、資源、環境、生産・流通・加工、地域振興の各視点から、多様な取組を計画しています。

【選定理由】

磯焼け対策として漁業者に加え都市部のダイバーとの協働での取組や、森林整備等における日本たばこ産業との協働での取組などは、独創性、先駆性、広域性があり、北海道マリンビジョン 21 を具現化する取組が充実していることから、他地域のモデルとして評価しました。



写真 2 積丹地域：都市部のダイバーとの磯焼け対策取組状況

○厚岸地域

【地域マリンビジョンの概要】

地域の目指す姿として「水産業を核とした活力ある町づくり」を掲げるなど、資源、環境、生産・流通・加工、地域振興の各視点から、多様な取組を計画しています。

【選定理由】

「大黒さんま」や「かきえもん」等のブランド化や、釧路開発建設部との「防災拠点化に関する協定の締結」による津波や地震対策に対する総合的な取組などは、独創性、先駆性、広域性があり、さらに地域マリンビジョンが厚岸の総合計画に位置づけられているなど、北海道マリンビジョン 21 を具現化する取組が充実し

ていることから、他地域のモデルとして評価しました。



写真 3 厚岸地域：「大黒さんま」、「かきえもん」の広告資料

■「推進地域」の追加指定

モデル地域に準じる地域である「推進地域」には、様似地域を追加指定しました。本地域の概要及び選定理由は、下記の通りです。

○様似地域

【地域マリンビジョンの概要】

地域の目指す姿として「持続的な水産業の形成と連携強化による漁業活動の活性化」を掲げる、生産・流通・加工、地域振興の各視点から、関連する取組を計画しています。

【選定理由】

資源や環境の視点からの取組が不足しているものの、ジオパークと海の資源を組合せた取組は独創性が

あり、さらに近隣地域と連携した日高昆布に関する取組は広域性の確保に努力が見られることから、北海道マリンビジョン 21 の具現化に資するものとして評価しました。



写真 4 様似地域：ジオパークフットパスツアーにおける「ウニの殻むき体験・試食」状況

3 さいごに

今回のモデル地域等の指定により、「モデル地域」が 16 地域、「推進地域」が 5 地域になりました。

現在、全道の各地域では、昨年 6 月の「北海道マリンビジョン 21」改訂版を踏まえた地域マリンビジョンの改訂作業を進めており、北海道開発局では、これらの地域の取組に対し、積極的に支援してまいります。

